

研究だより

“APPROACH”
第25号

佐賀市立本庄小学校
佐賀大学教育学部代用附属

「新たな学びの追求」

2年次

平成30年2月9日(金)

はじめに

本庄小学校の研究発表を、心待ちにしている先生方。「新たな学びの追求」を研究主題にかかげ2年次となりました。先生方は、新指導要領の中核である「主体的・対話的で深い学び」の授業の形態やカリキュラムマネジメントを検討され始めていらっしゃることでしょう。本校の研究が皆様の授業実践や研究の道しるべとなれば幸いです。

本校では、子ども一人一人がよりよき学び手をめざし、自分たちで成し遂げた充実感を味わい、学ぶ価値や自己の成長を実感する深い学びを求めています。深い学びとは、単に、「感じる」「比べる」「関わる」ではなく周囲や未来への転移や展望をふまえ「感じ取る」「比べ合う」「変えて考える」「問い直す」「関わり続ける」「生み出す」など次のステップへのベクトルを意識させることではないかと考えます。

本校児童には、表現力(話す)に欠ける面があり、実態に合わせて、本年度の学校全体の合い言葉を「笑顔では・は・は」としてきました。「**は**」覇気、**は**」反応、**は**」発揮」です。子どもが自ら関わろうとする覇気、反応する姿勢、自分の力を十分発揮するためには、単元との出会わせ方の工夫や自己評価・相互評価ができるふりかえりのポイントなどの教師の手立てが必要です。

本庄小では、これらの力をめざし、児童一人一人が自信を持って未来を創る人材になるように、教科固有の【育みたい資質と能力】を設けて、授業づくりに励んできました。また、他教科につながる教科横断的なカリキュラムづくりを提案しています。

10月には、特別支援学級もあわせて全教科「授業力向上相互診断シート」を活用した授業研究会を行い、参観者の先生方とともに、児童の実態に合った力をつけるための構想や手立てを討議することができ感謝申し上げます。

2月9日の研究発表会においては、12教科等および特別支援教育の授業に加え、佐賀県で3校に加配されている日本語指導が必要な児童に対する授業も公開し、授業研究会及び分科会等で研究協議を行います。

講演は、武庫川女子大学教授の押谷由夫先生です。専門は、道徳教育で、総合単元的な道徳学習を提唱され、『道徳の時代がきた!』『道徳の時代をつくる』『道徳教育 理論と実践』など多数の著書で多くの先生方をご存知かと思えます。特別の教科 道徳が担うグローバル化時代の道徳教育について たくさんのヒントをご紹介いただけることと思えます。

ぜひ、多くの先生にご参会いただき、本校研究に対してご批正、ご指導を賜るとともに、お一人お一人の「新たな学びの追求」の一助になることを願っております。



佐賀大学教育学部代用附属

佐賀市立本庄小学校 校長 権藤 順子

新たな学びの創造に向けて

佐賀大学教育学部 准教授 本庄小学校主事 宇都宮 明子

本年度公示された小学校学習指導要領では、改訂の基本方針として、育成を目指す資質・能力の明確化、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進が図られている。本庄小学校が昨年度より設定した研究主題「新たな学びの追求」は、この基本方針と合致するものであり、昨年度の研究発表会より今後の新しい方向性を示すべく意欲的な公開授業を実施している。



児童中心主義的な教育方法が重視される小学校の各教科では、これまでも主体的・対話的な学習がめざされてきた。しかし、未だに「主体的・対話的で深い学び」が求められるということは、真の意味での主体的・対話的な学習がなされておらず、結果として深い学びへと至っていないという現状の授業の課題が依然として残っているということを意味しよう。深い学びを実現するには、同じく基本方針とされている育成をめざす資質・能力を明確化することが不可欠である。深い学びでは知識、関心・意欲、技能、思考・判断など多岐に亘る汎用的能力が育成されるため、その育成を評価する規準も必須となる。「主体的・対話的で深い学び」はコンテンツ・ベースからコンピテンシー・ベースへと学習を転換し、授業を新たな局面へと進化させることを求めているのである。

本庄小学校の先生方は、この学習の転換に果敢に挑み、新たな学びとは何かを問い続けている。新たな学びを明らかにするためには、真の主体的・対話的な学びとは何か、授業においてどのような資質・能力を育成するのか、それをいかに評価するのかといった、これまでの学校教育において不問に付されていた多くの難題に取り組み、自ら回答を見出していかななくてはならない。そのため、私は、本庄小学校の先生方の取り組みを「新たな学びの創造」と呼びたい。新たな学びは追求した先に存在するのではなく、先生方自らが創造するものなのである。その創造の成果が本年度の研究発表会において公開される。是非多くの先生方に見ていただき、新しい学びについて大いに議論がなされることを願っている。

「攻める」教師集団

研究主任 森 隆久

2030年の社会と子供たちの未来を見すえた次期学習指導要領が公示された。

「見方・考え方」「資質・能力」「主体的・対話的で深い学び」「社会に開かれた教育課程」「カリキュラム・マネジメント」「外国語」「特別の教科道徳」「プログラミング学習」「特別支援教育」…多くのキーワードが並ぶ。

私達は、今、教育の大きな変革期の直中にある。

このようなとき、人の生き方は二通りある。

一つは、「守り」。「変わらない」所に焦点を当て、そこにしがみつ়く。

一つは、「攻め」。「変わる」所に焦点を当て、積極的に挑んでいく。

本校は、「攻め」の生き方を選んだ。

研究主題を「新たな学びの追求」とし、児童の実態から各教科等が育成すべき「資質・能力」を明らかにした。今年度は、「資質・能力」の見直し、「資質・能力を育成するための教科等横断的なカリキュラム」の作成、「資質・能力」を育成するための発問・指示の明確化、「授業力向上シート」を用いた研修等、様々なことに取り組んだ。

未知の世界を「攻める」時、常に「これでいいのか」と不安がつきまとう。それでも私達が挑み続けることができたのは、そこに「子供の事実」が存在したからだ。

これからも、子供たちと共に「攻め続ける」教師集団でありたい。



公開授業の紹介

国語科

学 級 第1学年3組

授業者 江里口 大輔

学習材 「スイミー」(東京書籍1年下)

《授業・授業研究会の構想》

「一ぴきだけは からす貝よりも まっくろ。およぐのは
だれよりも はやかっただ。名まえは スイミー。」

だれもが読んだことのある、名作『スイミー』。この物語を子供たちはどのように読み、この物語からどのような世界を広げてくれるのでしょうか。

本年度、国語部では、「学習課題」を柱とし、「活動材」を位置付けながら、主体的に学び続ける子供の育成を目指して、授業づくりをしてきました。その中で子供たちは自ら言語活動に取り組み、学んだことを自覚しながら、目指すべき資質・能力を身に付けてきました。子供たちの言葉に物語の世界が広がり、真剣な表情に確かな学びが現れます。そんな子供たちが作り上げる学びをご覧頂きたいと思います。



学 級 第2学年2組

授業者 平田 昌志

学習材 「あなの やくわり」(東京書籍2年下)

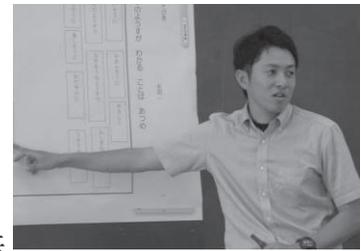
「なぜ どうして 科学のお話」(学研)

《授業・授業研究会の構想》

「国語の授業おもしろい!」「先生、新しい言葉見つけたよ。」子供が生き生きと自分で見つけた疑問を自ら解決しようとする姿をお見せできればと思います。

本学級の子供達は、音読発表会、音読劇、順序マップ、説明書作りなど、「読むこと」を中心に単元の学習課題に向かい取り組んで来ました。言葉を根拠に人物の様子や順序性などを考えたり、語彙を増やすため言葉探しをしたり、常に言葉を意識しています。

本単元では、2つの学習材を用いて確かな読みの力を身に付けさせます。日常生活の中の様々な不思議や仕組みを題材としながら、説明の順序性や文章の構成など説明の仕方を子供たち自身で紐解いていきます。



教えるということと単元学習の創造

佐賀大学教育学部 達富 洋二

先日、関東で行われた教育フォーラムに参加したとき、昨年度の本庄小学校の研究発表会での学習指導案を持った方々がいた。たずねかけられる内容は「なぜアクティブ・ラーニングということを前面に出さないのか。」「これはルーブリックと呼ぶべきである。」「普段からこのようなことをしているんですか。」「というものであった。「アクティブ・ラーニングはわざわざ取り入れているものではない。」「本庄小の教室の中で効果的な評価のてびきがたまたま世間で言うルーブリックに似ていた。」日常の国語教室のことを話した。「本庄小学校の国語科学習は型だけではない」ということを理解してもらうのに時間はかからなかった。余計だと知りながら、「本庄小の国語教室は一人一人の学びの《自分らしさ》を創造している」と付け加えたとき、「年間を通して続けておられるに違いない。」とおっしゃった。



教えることは確実に教える。価値ある他者と学ぶことができる単元を創造する。本庄小学校国語科の応援団長として、「子どもが学びの《自分らしさ》を創っている」日々を創っている二人の先生を頼もしく感じている。

社会科

学 級 第6学年1組

授業者 榎津 優規

単元名 「武士の世の中へ」(東京書籍)

《授業・授業研究会の構想》

社会科部では、社会の背景や特色、人々のかかわりを理解する「社会を考察する力」、そこに潜む問題の解決のために、これからの社会のあり方を考える「社会を構想する力」の育成を目指しています。昨年度は「社会を考察する力」に重きを置き、思考ツールを用いて友達と話し合いながら知識を整理し、社会のしくみを考える授業づくりを行ってきました。2年次となる本年度は、「社会を構想する力」を育成するために、思考ツールを活用した話し合い活動が有効に働くのかということを検証しています。

本単元では、武士の世の中のしくみについて考え、当時の時代背景を考慮しながら、よりよい社会のしくみを構想していきます。歴史を学ぶことを通して、今を考える力をつけていく。他者と対話することで、自分とは異なる考え方の良さや欠点、自分の意見を見直しながら多面的・多角的に考えるようになっていく子どもの姿をご覧ください。



社会科における新たな学びの創造

佐賀大学教育学部 宇都宮 明子

本庄小学校社会科部の研究主題は、「社会を見つめ、未来を考え続ける子どもが育つ社会科学習」である。この主題がめざすのは、現状の社会を無批判に受容するのではなく、さらに良い社会をめざして社会を再形成していく力を持つ市民へと子どもを育成することである。「社会認識を通して市民的資質を育成する」と定義される社会科は、社会認識と市民的資質を統合的に育成する社会科を模索する途上にある。社会認識と市民的資質をどのように捉えるのかは、「主体的・対話的で深い学び」と関連づけられ、今後さらに検討がなされていくであろう。



本校社会科部では、社会科で育成すべき資質・能力として「社会を考察する力」、「社会を構想する力」と設定し、前者で社会の仕組みという概念的知識、後者でその概念的知識を吟味・検証することで社会の仕組みの再編を図っている。これは、社会認識と市民的資質の統合的育成のモデルを示しており、新たな学びを具現化しようとする試みである。この挑戦的試みが議論されることを期待したい。

算数科

学 級 第4学年1組

授業者 野口 太輔

単元名 「箱の形を調べよう」(東京書籍)

《授業・授業研究会の構想》

本単元「箱の形を調べよう」の学習では、直方体や立方体、平面上や空間のものの位置の表し方について理解し、図形についての見方や感覚を豊かにすることをねらいとしています。単元の前半では、観点を決めて立体を観察したり、分類したりして、面、辺、頂点などの構成要素を確かめていきます。展開図や見取図をかく際には、観察、構成や分解といった活動を豊富に行い、面、辺、頂点の構成要素について確かめ、その技能を確かなものにしていきたいと考えています。本時においては、問題を解いた後に、はじめの問題の構造を変えた問題を提示し、身に付けた知識・技能を活用する活動を取り入れる予定です。子供たちが、主体的に取り組む中で、形の構成要素に目を向けていく姿をお見せできればと考えています。



学 級 第6学年2組

授業者 重富 俊彦

単元名 「順序よく整理して調べよう」(東京書籍)

《授業・授業研究会の構想》

本単元は、順列や組み合わせについて、起こり得るすべての場合を順序よく整理し、落ちや重なりがないようにして調べることができるようになることをねらいとしています。

順列や組み合わせについて、提示された問題を解決し、「チーム数が増えても学習したことが使えるかな」や「リレーの走順でもできるかな」など、子供1人1人の問いをきっかけとして、提示された問題の数や場面を自ら変えながら学習を進め、理解を深めていく子供の姿をお見せできればと考えています。



統合的・発展的に考える

佐賀大学教育学部 瀧川 真也

算数科の学習においては「数学的な見方・考え方」を働かせることが必要ですが、その中には「統合的・発展的に考える」ことが含まれています。算数では、問題を解決して答えが得られたら終わりではありません。問題の解決過程を振り返って、今までに学習した他の問題の解決方法と似ているところに気付いたり、問題で使われている数や図形を少し変えたら同じ方法が使えるかということを考えたりすることによって、新しい算数の課題を見いだし、学んだことを広げることができるようになります。同時に、得られた知識がどのような場面で活用できるかを考えることも可能になります。



理 科

学 級 第5学年3組

授業者 山下 仁士

単元名 「もののとけ方」(大日本図書)

《授業・授業研究会の構想》

本校理科部が重視する育成すべき資質・能力は、「問題解決の見通し
もちながら調べる力」です。ストーリー性のある単元構成と対話的な
学びを通して、子供が、見いだした問題について、見通しをもちながら、思考を連続させて解決
していくことが、自然の事物・現象をより深く調べる子供の姿につながります。

本授業では、単元を貫く「大問題」の解決のために、物を溶かす前と後で重さは変わらないこ
とについて観察・実験を通して調べます。観察・実験の結果から導いた考察の共通点や差異点を
友達と検討し合うことで、より妥当な結論を導き出していく子供の姿をお見せできればと思いま
す。



学 級 第3学年3組

授業者 瀬戸 勝尚

単元名 「じしゃくのふしぎをしらべよう」(大日本図書)

《授業・授業研究会の構想》

本年度は、昨年度までの手立てであった「大問題」と「考察の検討会」
に加え、観察・実験を行う前に、そこで着目すべき点を明確にする「観
察のポイント」を子供自らが見いだす活動を取り入れています。「観察の
ポイント」によって、子供は事物・現象の変化とその要因を捉え、それらに関係付けて考えるこ
とができるようになると考えます。

本授業では、「観察のポイント」の「変えること」として「調べる物(素材)」,
「変わること」として「磁石につく・つかない」を、子供が意見交流をしながら見いだします。それにより、子
供が目的意識を高めて観察・実験を行う姿や、学習問題と整合性のある考察をし、納得して結論
を導き出す姿をお見せできればと思います。



子ども達が自然事象を見る目の共通性と多様性

佐賀大学教育学部 世波 敏嗣

研究の2年次となりました。初年度には、単元を通した問いである「大
問題」の設定と、実験結果の考察を共有させ比較・検討させる「考察の検
討会」の導入が取り組まれました。それらに加え、本年度は、予想から観
察・実験の計画・立案を行わせた後、実際の観察・実験の前に、子ども自
らの「観察のポイント」を案出させ交流させます。このことによって、異
なる観察・実験計画でも共通のポイントが提案されたり、同じ観察・実験
計画でも異なる多様なポイントが提案されたり、などの様々な場合が起こ
ると思われれます。その後、観察・実験を行わせて結果を考察させ、「考察の検討会」で各自の考察
を練り上げさせるのです。こうした過程を経る際、子ども達が自らの「観察のポイント」を見直し
たり自信を持ったりしながら納得していくことにより、自然事象の見方や考え方を多様化させたり
深化させたりすることができると考えています。そして単元の最後には、子ども達が主体的に「大
問題」を解決できるようになることを期待しています。



生活科

学 級 第1学年1組

授業者 嶋田 恭子

単元名 「わんぱくにんじゃ たんけんたい ～わたしのすてきにゆうす～」

《授業・授業研究会の構想》

「にんじゃ村(学級園)をお花いっぱいになりたいな。」「学校のことをみんなに教えるガイドさんになりたいな。」と、思いや願いの実現に向かって取り組む子どもたちの眼は真剣です。「〇〇だったらいいな。」そんな子どもたちの思いや願いを大切に、授業づくりを行ってきました。単元の中に「モニタリング授業モデル」を取り入れ、子供たちは繰り返し活動を振り返り、気づきを捉えなおして対象と関わっていきます。

今回の単元は、大きくなったことや自分でできるようになったことなどを振り返っていきます。そこで、できなかったことができるようになった自分に気付いたり、「これはどうだったかな。」と巻物を見返したり、友達に聞いたりしながら、疑問を追究していきます。「もっと知りたい。」と次の活動に自らつなげていく子どもたちの姿をご覧ください。



新たな学びは子どもの発達を促す

佐賀大学教育学部 若本 純子

これまでのアプローチにおいて、生活科は、幼児期から児童期への発達移行を射程に、幼児教育と初等教育を橋渡しする役割を担うユニークかつ重要な教科であると、繰り返し示唆してきた。このたび改訂される新学習指導要領において、小学校入学当初における「スタートカリキュラム」の充実における中核的な教科として生活科が位置づけられた。生活科の真価がより多くの学校関係者や保護者に理解・共有され、小1ギャップなどの不幸な事象が減少することを願っている。

さて、今回の研究「新たな学びの追求」において、生活科では、すべての子どもたちが自身の気づきをスムーズに明確化し、次の活動へと繋げていけるアプローチを定型的に示そうと果敢に取り組んできた。子どもたちが「活動」を「学び」へと昇華し、充実感を得て新たな探求へと向かう姿をいきいきと描き出す研究になるであろう。



音楽科

学 級 第4学年2組

授業者 御領原 翔太

単元名 「曲の気分を感じ取ろう」(教育芸術社)

《授業・授業研究会の構想》

本校音楽部では、子供たちが音楽的な特徴や構造と曲想のかかわりを考えながら、よさを味わって鑑賞すること、演奏する技能を自分の思いや意図を結び付け工夫して表現することを目指しています。また、「演奏する技能」「演奏を工夫する力」「音楽に向かう姿勢」を相互に関連させながら「音楽に創造的にかかわる力」を育成することで、自分にとって魅力的な音楽をつくる子供が育つと考えています。

本授業では、子供たちが「比較鑑賞活動」を通して見いだした「音楽を形づくっている要素(音楽の種)」を根拠に、思いや意図をもって音楽づくりへつなげて、自分たちにとってよりよい表現を目指していく姿をお見せしたいと思います。



「音楽づくり」における「鑑賞」の意味

佐賀大学教育学部 荒巻 治美

本校音楽科では、「音楽づくり」に重点をおかれながら、音楽に創造的に関わる力の育成をめざして研究を進められている。そのために、本年度は、題材のなかに「比較鑑賞活動」を取り入れられている。音楽には、音高やリズムなどの構成的側面と、音色や音量などの解釈的側面がある。主として、前者には作曲家が、後者には演奏家に関わる。教師はその区分を明確にした上で、子どもに各側面の内容に即して、音楽を形作る多様な方法を学ばせる必要があるように思われる。前者では、様々な作曲家が同じ主題について作曲した作品を比較聴取・分析するなかで、音高やリズムなどを組織づけるための多様な技法を身につける。一方で、そうして創られた、ある音楽作品について多様な演奏解釈を比較聴取・分析するなかで音色や音量などについて解釈の方法を学ぶ。子どもは、それらによって「音楽づくり」の基礎を形成するように思われます。研究公開が待たれます。



図画工作科

学 級 第2学年3組

授業者 中山 洋子

題材名 「アンブレラ たのしかさ」

《授業・授業研究会の構想》

子供達は、「ぴかそタイム」で様々な素材体験をして、気付きやひらめきを「ぴかっとノート」に書かためています。これまで、「ふくろがうちゅう人になっちゃった!」では、米袋の「ぴかそタイム」での気付きやひらめきを表現に生かしたり、「大すきぼくたちの本庄町～光をつかって～」では、光の「ぴかそタイム」をした後に、色画用紙でつくった建物に光をあてて表現したりしてきました。

今回は、素材体験を通してビニル傘の特徴に気付き、気付きを元に傘を楽しく変身させる題材です。既習の素材を同時に扱うことで、表現の幅をより広げられると考えています。子供が夢中で表現しようとする姿や、素材の特徴やこれまでの学習を記録した「ぴかっとノート」を活用しながらビニル傘が楽しく新しい姿へと変身していく様子をぜひご覧ください。



児童の素材体験と「ぴかそタイム」

佐賀大学教育学部 栗山 裕至・和田 学

本庄小学校図工部の素材体験を生かした教材開発の試みは、多感な成長期の児童の直接体験を豊かにする意義深い活動であると同時に、学習指導要領(図画工作科編)において、児童が能動的な活動により感性を育むことへ対応するものかと思えます。「ぴかそタイム」は、素材体験を切掛けとし、児童のひらめきから制作へとつなげることで、授業テーマへの期待感を持たせることで、自身の経験への意義付けがより高まることが想定されているといえます。また、「ぴかっとノート」は、素材体験の記録を留めるもので、児童が学びを振り返られるよう計画されたものです。例えば、素材の形状がどれくらい変化したかという可塑性、光をどれくらい通過するかという透過性、手・ハサミなどの用具による効用感の違い、接着媒体としての糊・テープの有用性の違いなど、單元ごとの素材感を比べる手掛かりになる



かと思ひます。現在、佐賀県の教育現場は、ICT普及率が高いことで有名ですが、情報操作の技能に限らず、こうした素材の直接体験を軸とした教材研究が盛んに行われる意義があるかと思ひます。
(文責：和田)

家庭科

学 級 第5学年2組

授業者 古賀 穂乃香

単元名 「じょうずに使おう お金と物」(開隆堂出版)

《授業・授業研究会の構想》

家庭科部では、家族の一員として学んだことを家庭で生かし、生活をよりよく工夫する生活者の育成を目指しています。今年度は、自分の考えを対話を通して広げたり深めたりする「なっとくタイム」を研究の視点に位置付け、生活に生きて働く知識・技能の習得に取り組んでいます。「なっとくタイム」では、友達との対話を通して「なぜ、そうするのか」「それにはどのようなよさがあるのか」「もっとよい方法はないか」等を考えながら生活の営みについて科学的に理解する学びを目指してきました。

本題材では、生活を支えている物やお金についてよりよい消費者として見方・考え方を育てていきます。公開授業では、失敗や無駄のない買い物をするためにはどうすればよいかを、買い物計画を立てながら考えていきます。「なっとくタイム」では、立てた買い物計画を自己評価し、グループで計画性や安全性、持続可能性等の視点から買い物の仕方について検討し、よりよい消費者としての責任ある行動とはどうすることかを理解していきます。子供たちの学びの姿をご覧ください。



転移性のある知識・技能

佐賀大学教育学部 中西 雪夫

本庄小家庭科部では「転移性のある知識・技能」をキー概念として研究を進めています。現実の生活のさまざまな場面で生かすことができる知識・技能を「転移性のある知識・技能」と考えました。さまざまに状況が変わる現実の生活では、学校で習った通りのやり方ではうまくいかないこともあります。そういうときは習得した知識・技能を状況に応じて変えて使用しなくてはなりません。布の厚さによってボタンの足になる糸に糸を巻きつける回数を変えたりすることができれば、「転移性のある知識・技能」として身につけていると考えています。もしかしたら、応用力とか類推する力とか探究心のような力が影響するかもしれませんが、知識・技能を習得する段階でどのように習得させればよいのかを考えてみました。

転移する場面は実生活の中なので授業中に見ることは難しいですが、どのような授業をすれば転移性のある知識・技能を習得できるのかはご覧になれると思ひます。



体育科

学 級 第2学年1組

授業者 陶山 淳史

単元名 「駆け抜けろ！本庄オリンピック！」

《授業・授業研究会の構想》

本校体育科では、運動に熱中する子供を育てることを目指して取り組みを進めてまいりました。運動に取り組む中で、仲間と共に課題を発見し、試行錯誤しながら解決に向かう過程において「できた・分かった」を積み重ねた子供は、運動の楽しさを実感し、主体的に運動に挑戦し続けることができると考えます。

本単元では、走の運動遊びを行います。運動の中で、「こうやったら楽しそう」「あれをやってみよう」「こんなことしてみたら？」と子供があーだこーだ言いながら、運動を楽しんでいる姿に体育科が目指す「運動に熱中する姿」が現れると考えます。

本校体育科の研究の視点である「パッとタイム」で、運動に関して自分の考えや思いを言い合いながら運動に熱中する子供の姿をご覧ください。



学 級 第5学年3組

授業者 溝口 健太郎

単元名 「走り高跳び～1cmでも高く」

《授業・授業研究会の構想》

走り高跳びは、自分が設定した記録を跳び越すことができるか・できないかを楽しむ運動です。非常にシンプルな分、子供は走り高跳びの世界に没入することができます。

本単元で子供たちが追求していく課題は、「どうすれば自分の目標記録を跳び越すことができるのか」です。その課題解決に向かって、友達とアドバイスをし合ったり、競い合ったりして試行錯誤し、繰り返し挑戦し続けていく姿に、本校体育科が目指す、「運動に熱中する姿」が現れると考えます。

本校体育科の研究の視点である「パッとタイム」を活用しながら、仲間と共に走り高跳びに熱中する子供の姿をご覧くださいと思います。



出会いを通して新しい価値に向かう自己変容

佐賀大学教育学部 堤 公一

松田恵示（2016）は、「学ぶ」ことの本質を「出会って、自分が変わる」とし、「体育では、運動やスポーツに関わって、これまで知らなかった人やモノや出来事に出会い、運動やスポーツを学ぶ中で子どもたち自身が変わり、運動やスポーツとの新しい関係を築いていくことができるようになること」と述べています。このような「出会い」の観点から生き生きと運動やスポーツを楽しむ子どもの姿をイメージし、体育授業をどのようにデザインしていけばいいのでしょうか？



「運動に熱中する子どもが育つ体育科学習」を掲げる本庄小学校体育科の2年目のチャレンジとして、授業づくりのまなざしを「カラダを動かす力」が上手になることから「運動に夢中になる力」が上手になることと捉え直しました。「学習者にとって運動やスポーツと関わることの意味」を大切に授業を共に考えてみてはいかがでしょうか？

松田恵示・鈴木秀人編著（2016）教科教育学シリーズ⑥体育科教育. 一藝社：11

道 徳

学 級 第3学年1組

授業者 嬉野 一紀

単元名 「みんなのことを考えて」（自作資料 他）

《授業・授業研究会の構想》

本校では道徳教育において、「道徳的問題に向き合い、道徳的実践をしようとする力」を育てることを目指しています。育成すべき資質・能力を、①道徳的問題を発見する力 ②道徳的価値を考える力 ③道徳的問題を多面的・多角的に考える力 ④道徳的価値を理解する力 ⑤自分に何ができるか考える力 ⑥自己調整力と捉えます。これらの資質・能力を育成するために、「能動的道德学習システム」を取り入れて取り組んでいます。昨年度は、①～③の資質・能力を育成してきました。2年次となる本年度は、④～⑥において理解した価値とできそうであると考えたことが、道徳的実践へ有効に働くのかを検証しています。本単元は、身近な友達・周りの人との関わりについて考えた上で、みんなのことを考えて行動するとはどういうことなのかを考えていきます。直面する様々な状況を見つめ、自分はどうすべきか判断し、それを実行する手立てを考えて行動しようとしていく子供たちの姿をご覧ください。



学 級 第4学年2組

授業者 森 隆久

単元名 「よりよい自分になるために」（自作資料 他）

《授業・授業研究会の構想》

関わる対象やその時々状況によって、ある行動を選択していきます。その行動の背景には、各人が重視している道徳的価値があります。自分にとって「当たり前」と思っている道徳的価値を表出し、他者が「当たり前」と思っている道徳的価値と向かい合い、議論していく中で、道徳的価値について多面的・多角的に学び、実践へと結びつけていく。よりよい自分になるために、楽しく、そして熱く議論する子供達にご期待ください。



道徳的実践力を育てるための能動的な学習システムの構築

佐賀大学教育学部 石井 宏祐

本庄小学校では、「能動的道德学習システム」を提案し、その導入に取り組んでこられた。6つの過程から構成され、道徳的課題を「考え、議論し、さらに考える」プロセスが盛り込まれたシステムである。第1過程では道徳的問題を見つける力（発見力）を育て、第2過程では道徳的問題に含まれる道徳的価値を考える力を育て、さらに第3過程で道徳的問題を多面的・多角的に考える力を育てることを目的としている。子どもたちが道徳的価値の多様に触れる機会が丁寧に設定されている。そして、子どもたちは、道徳的問題に実際に遭遇した時、道徳的な行動を多様に選択できるよう第4過程以降の学びに取り組んでいく。第4過程で道徳的価値を振り返り理解を深め、第5過程で自分に何ができるか具体的に考え、第6過程で自分の道徳的実践をセルフ・モニタリングしていく。これらの過程を通じて、道徳的課題に対する自己調整力、すなわち道徳的実践力が育まれていくのであるが、道徳的実践力がどのように自らの裡にあるのかに目を向けながら学習できる点が、この能動的道德学習システムの大きな特長になっている。



特別活動

学 級 第3学年2組

授業者 水町 遥香

議題名 「にじいろチームスター！一人一人のよさを4年生へ、
学校へはばたこう～第8回わくわくプロジェクト～」

《授業・授業研究会の構想》

「自分」と「みんな」の2つの軸で学級や学校生活を考え、少し先のなりたい自分たちの姿を描いていきます。その思いや願いを実現させようと、全員の心を一つにして取り組むことで、自他を尊重し合いながら学級や学校生活づくりに参画し続けることができると考えます。本校特別活動部の研究の視点、つかむ過程「わくわくプロジェクト」では、学級会の議題となるアイデアを全員で考えます。2年次は、学級や学校生活の課題にも目を向け、自分たちで創意工夫して解決したり、誰かのために役立ったりする活動に向かって取り組んでいます。これまで学級という集団で培ってきたことや一人一人のよさを生かし、次の学年になるため、学校みんなのためにやりたいことを実現させようと、意見を伝え合い、課題を見いだしていく子供たちの姿をぜひご覧ください！



学 級 第1学年2組

授業者 黒岩 卓也

議題名 「みんなの力を出しあおう！
～だい8かいわくわくプロジェクト～」

《授業・授業研究会の構想》

「自分たちで1年2組を楽しい学級にしよう。」子供たちはこれまでに、学級で1つのことに向かって、一人一人が役割をもったり、得意なことを生かしたりしたことで、学級としての一体感や、自分が学級の大切な一員なんだということを味わってきています。研究の視点である、つかむ過程の「わくわくプロジェクト」では、学級全員でアイデアについて話し合います。今までに「みんなで」「ひとりひとり」「なかよく」という学級目標に照らし合わせて、自分たちで楽しい学級にしようと思ってきました。今回の授業では、1年生最後に、この学級でよかった、嬉しかったと思えるようにアイデアを出し合います。学級目標に向かって「自分」のしたいことや「みんな」のために考えたことを伝え合っていく姿を、ぜひご覧ください！



自分たちの手で学級や学校生活を創り出すことを楽しむ子供が育つ学級活動

佐賀大学教育学部 松下 一世

新学習指導要領等改訂では、特別活動の目指す資質・能力については、「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」が重要な三つの視点として整理されています。

社会参画の意識の低さが課題となる中で、自治的能力を育むことがこれまで以上に求められているとあっていいでしょう。自分たちの権利を行使するために、主権者として社会参画する力をつけるためには、子どもをおとなの指示通り行動させるのではなく、子どもが学校や学級の問題に対して積極的に関与し、自ら考え、企画する場が必要です。そういう機会を通して、自分たちの手で学級や学校を変えていくことができるのだという自信をつけてほしいと思います。このような機会が、本庄小の特活『わくわくプロジェクト』です。



外国語活動

学 級 第5学年1組

授業者 吉田 明寛

単元名 「SAGA SAIKO たんけんマップ」

《授業・授業研究会の構想》

外国語活動において、子供が実際に自分が外国語を使うイメージをもつことが大切なのではないでしょうか。「おっ、何となく通じているぞ!」「英語で友達と会話しているよ!」と実感することによって、言語学習へのモチベーションの向上を図れると思います。実際に使われる状況や目的に応じて自ら学びとる主体的な学びを本研究では子供に味わわせたいと考えます。

本単元では、外国の方に紹介したい佐賀の魅力を伝えるべく、自分達で調べ、何とか伝えようとする子供の姿をお見せできればと考えております。「佐賀にはこんないいところがあったんだ。」「佐賀の魅力を何とかして伝えたい。」そんな子供のワクワク感が伝えられるような活動になればと思います。



「ことば」への気づきを促す外国語活動の授業実践に向けて

佐賀大学教育学部 林 裕子

次期学習指導要領において新設された小学校高学年「外国語科」では、4技能（5領域）（「聞くこと」、「話すこと（発表+やりとり）」、「読むこと」、「書くこと」）における言語活動を通してコミュニケーション能力の基礎を養うことが目指されます。約8時間で構成される外国語科の単元では、英語習得を促す短時間学習やインプット（気づき、慣れ親しみを促す）活動の実践が求められます。今年度の授業研究では、外国語科への円滑な移行を図る観点から、次期学習指導要領で求められる資質・能力に含まれる「表現力」に主眼を置く単元設計と言語活動の実践に取り組みます。Small Talk（身近なトピックについて英語で話す活動）とLet's Read and Writeをセットで行う帯活動（単元を貫く短時間活動）を取り入れた単元設計を行い、ゴールにおける伝え合う活動の深まりを目指します。単元ゴールに向かう過程のインプット活動を充実させ、他者に配慮しながら語彙表現や非言語的手がかりを活用して情報や考えを伝え合い、自らの思いや考えを深めていくことができる表現力の育成を図ります。



特別支援教育

学 級 あおぞら学級1・2

授業者 刀根 有紀（あおぞら1）・大坪 佐和子（あおぞら2）

単元名 「あおぞら1・2 みんな なかよし」

《授業・授業研究会の構想》

あおぞら学級1・2の子供達は、日々の生活において、「もっと友達と楽しく遊びたいな。」「こんなときはどう言ったらいいのかな。」という思いをもちながら過ごしています。

1学期から2学級合同で週に一回自立活動「みんななかよし」に取り組んでいます。1学期は相手の動きを見ること、2学期は相手と目や手の動きを合わせることをめあてに取り組んできました。これまでの活動を通して、相手の気持ちを考えた言動が子供達の中に少しずつ見られるようになってきました。3学期は、みんなで心をつなげて行うハンドベル演奏を通して、自分の目標に向かいながら、友達にアドバイスしたり、友達の頑張りを認めたりし合う姿をめざしています。本時では、活動がうまくいかないときも、相手との関わり方を考えながら、生き生きと活動する姿をお見せします。



学 級 あおぞら学級3・4

授業者 江口 佐智子 (あおぞら3)・溝口 隆一郎 (あおぞら4)

単元名 感謝の気持ちを伝えよう ～「ありがとうパーティー」～
《授業・授業研究会の構想》

あおぞら学級3には下学年3名、あおぞら学級4には上
学年5名が在籍しています。自分の持てる力を発揮し「できた」「分かった」「もっとやりたい」
を実感できる授業づくりを日々目指しています。

特に今年度は、進んで他者とかかわったり、主体的に取り組んだりする態度を育むことをねら
いとして学習を進めています。そのためには、下学年と上学年と一緒に活動できる内容を設定し、
実際の生活に生かせる活動を見据え、そこに向かって創意工夫をするという単元構想が必要で
す。本単元では、2学期に実践した交流学級担任に感謝を伝えることを目的とした活動を充実さ
せ、単元の終末には交流学級とのかかわりを視野に入れた活動に取り組みます。自分の持てる力
を發揮して活動に取り組み、自己の達成感や満足感につなげていく姿をお見せしたいと思ってい
ます。



子供たちが生き生きと活動する授業

佐賀大学教育学部 芳野 正昭

本庄小学校特別支援学級の先生方は「一人ひとりの子供が『できた』『分
かった』『もっとやりたい』を実感できる授業づくり」を追求してきました。
子供たちは一人ひとりが生き生きと授業の活動に取り組んでいます。

「子供と先生方との信頼関係・子供同士の仲間関係を大切にした学級経
営」、「子供たち一人ひとりの障害特性および『できること』に着眼した手
立て・目標の設定」、「一人でできる状況作り」、「交流および共同学習の充
実をも視野に入れた知的障害特別支援学級の生活単元学習」、「動きを合わ
せる活動から相手の気持ちを考えることへと繋げる自閉症・情緒障害特別
支援学級の自立活動の指導」、「先生方の児童への言葉かけやチームティーチングの様子」等々、
多くの先生方と共有したい内容がいっぱい詰まった授業です。



日本語指導

学 級 日本語学級

授業者 西村 常裕

単元名 「テレビとの付き合い方」(東京書籍)

《授業・授業研究会の構想》

本校では昨年度から佐賀県初となる日本語指導担当教員が配置され
日本語学級が設置されました。校区内に佐賀大学を有する関係もあり
日本語指導を必要とする児童数は県内最多であり、現在6名の児童が指導を受けています。

日本語指導には、その児童の日本語能力に応じて「サバイバル日本語」「日本語基礎」「技能別
日本語」「日本語と教科の統合学習 (JSL カリキュラム)」「教科の補習」と様々な指導形態があ
ります。本時の学習では、日常会話ができるようになった児童の学習言語能力を向上させる目的
で開発された「日本語と教科の統合学習 (JSL カリキュラム)」を行います。教科を学びながら
同時に日本語能力を伸ばすことを目標としています。「二兎を追うもの一兎も得ず。」ならぬ「一
石二鳥」の「日本語と教科の統合学習 (JSL カリキュラム)」の授業を是非ご参観ください。



おわりに

平成29年3月に、新学習指導要領が公示されました。その総説の中で、『人工知能がどれだけ進化し思考できるようになったとしても、その思考の目的を与えたり、目的のよさ・正しさ・美しさを判断したりできるのは人間の最も大きな強みである・・・』と述べてあります。

ここからの時代を生きる子供たちには、複雑な状況変化に応じて目的を再構築できる力や他者と協働して課題解決する力が求められます。本校では、研究主題を「新たな学びの追求」とし、昨年度より、「知って・考えて・行動する」児童の育成を目指して実践に取り組んでおります。

2月9日の研究発表会では、「資質・能力の育成」「単元でデザインした授業」などの視点を取り入れた本庄スタイルの「主体的・対話的で深い学び」を実践いたします。平成32年度の完全実施に向けて、ぜひご参観いただき、ご批評をお願いいたします。

研究発表会へのご参加を心よりお待ちしております。



本校職員一同



講演会講師紹介

武庫川女子大学 教育研究所 大学院臨床教育学研究科 教授
おし た に よ し お

押谷 由夫 先生

【プロフィール】

昭和27年3月滋賀県生まれ。 広島大学大学院修了，教育学博士。
放送大学客員教授，「小さな親切運動」本部・顧問。日本道德教育学会会長。
全国個を生かし集団を育てる学習研究協議会副会長等。

広島大学助手，高松短期大学講師，高知女子大学助教授，文部科学省初等中等教育局小学校課教科調査官（道德担当，14年），昭和女子大学大学院教授を経て平成29年4月より現職。平成14年度より全国の小学生・中学生に配布されるようになった『心のノート』（後『私たちの道德』）事業に中心的事業にかかわる。今回の道德の教科科に関する審議を行った文部科学省の専門委員会の副座長，中央教育審議会専門部会主査を務めた。専門は，道德教育，教育社会学，教育学。総合単元的な道德学習を提唱し，一人一人の生き方を考える道德教育の実践的な研究に現場の教師と取り組む。主な著書として『「道德の時間」成立過程に関する研究』（東洋館出版），『総合単元的道德学習論の提唱』など，共訳として『世界の道德教育』（玉川大学出版），編著書として『道德の時代がきた！—道德教科化の提言—』（教育出版），『道德教育の理念と実践』（NHK出版），『アクティブ・ラーニングを位置付けて小学校「特別の教科道德」の授業プラン』など多数。



平成29年度 本庄小学校 研究組織

校長 権藤 順子				指 導
教 頭 三戸谷 史				佐賀大学教育学部 学部長 田中 彰一 主 事 宇都宮明子
指導教諭 江頭 恵子				
研究主任 森 隆久				
研究副主任 溝口隆一郎				
研究推進委員 山下 仁士	溝口健太郎	重富 俊彦		
榎津 優規	嶋田 恭子	寺崎 里美		

教科等	部員名(○は研究担当者)	学級・担当等	佐賀大学教育学部教員
国 語 科	○ 江里口大輔 平田 昌志	1年3組担任 2年2組担任	達富 洋二
社 会 科	○ 榎津 優規	6年1組担任	宇都宮明子
算 数 科	○ 野口 太輔 重富 俊彦	4年1組担任 6年2組担任	瀧川 真也
理 科	○ 山下 仁士 瀬戸 勝尚	理科専科 3年3組担任	世波 敏嗣
生 活 科	○ 嶋田 恭子	1年1組担任	若本 純子
音 楽 科	○ 御領原翔太	4年2組担任	荒巻 治美
図画工作科	○ 中山 洋子	2年3組担任	栗山 裕至 和田 学
家 庭 科	○ 古賀穂乃香	5年2組担任	中西 雪夫
体 育 科	○ 陶山 淳史 溝口健太郎	2年1組担任 5年3組担任	堤 公一
道 徳	○ 嬉野 一紀	3年1組担任	石井 宏祐
外国語活動	○ 吉田 明寛	5年1組担任	林 裕子
特 別 活 動	○ 水町 遥香 黒岩 卓也	3年2組担任 1年2組担任	松下 一世
特別支援教育	刀根 有紀 大坪佐和子 江口佐智子 溝口隆一郎 西山 恭子	あおぞら学級1担任 あおぞら学級2担任 あおぞら学級3担任 あおぞら学級4担任 あおぞら学級5担任	芳野 正昭
日本語指導	西村 常裕	日本語指導担当	西村 綾子 (福岡市教育委員会指導主事)
養護教諭	寺崎 里美	事務主査	坂井 孝輔
学校栄養職員	乗富 麻未	事務吏員	野村美佐江
少人数・TT	高添 勤子	事務員	渡瀬 勝
少人数・TT	山田 尚太	生活指導員	古賀 光子
学校図書館事務	太田 幸	生活指導員	北村 麻衣
学校図書館事務	徳田 珠美	特別支援学級支援員	中島真由美